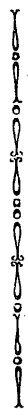


青年の風紀問題は比較的近來の語であるが、其前に顯はれた流行語は家庭に關したものであつた。世人が家庭の問題に注意するに至つたのは喜ぶべきことであるのであるが、夫と同時に不健全な家庭熱を青年者の思想に惹起したことも亦事實で、其不健全な家庭熱が、やがて今日の風紀問題に幾分かの關係を有つて居るといふことも亦事實であつて見れば數年前の「家庭思想」はやがて、今日の風紀問題の前驅の様に思はれるのである。



▲ラザニウム之力 新元素ラザニウムはエレクトロンと稱する一種の力を有するものにて此元素が此力を有する事は夥しき事にてダイナマイトの有する力よりも百万倍の力ありといふヨハネスブルグといふ處の學者ダーウインの調査によれば重さ貳百七十萬貫のものを地上十四町ばかり引き上る力は七匁許のラザニウム中に含まれありといふ又六千湮(一湮は我凡そ十六町位)の航路を十五湮の速力にて一万二千噸の船を走らす程の力は百五十匁程のラザニウムに含まれる割合なりといふ。

選夫選妻の説

温香堂主人

「選夫選妻」とは、讀で字の通りです、平たく云は「智定め、嫁定め」のことで御座います、これは、往昔から實際人々が遣つて居ることでありますから、珍しいものではありませぬけれど、その選び方定め方は、時代の變遷と共に變化せねばなりません、如何なる主義に依らねばならぬかと云ふに就きましては、自ら茲に説が立てられるので御座います、温香堂主の説が、今の世の人の選夫選妻に當つて、幾分にも參考となりませぬならば、結構なと存じます

先づ人がその夫を選び、妻を選ぶと云ふとは、大切のことでありまして、世間一般の人々が遣つて居るやうに、輕々敷くは出來無いとであらうと思ふので御座います、彼の女中、小間使ひを雇ひ入れますにも、生れた里から、親元の身分から、本人の氣性だとか、起居振舞ひ杯、穿鑿すれば随分

面倒なものです、けれど、その面倒をせすに置いて御覽なさい、それこそ不可者を撰まされるのです、まして借老同穴の契り結び、「お前百せで妾や九十九まで、俱に白髪が生るまで」の永い月日を、異體同心に、二身一心に遣つて行かうと云ふ其の夫を選び妻を選ぶに於いては、十二分の注意を用るとは無論のとであらうと思ふので御座います。

近頃新聞紙上に『結婚したし』『妻を求む』『養子に行きたし』杯の廣告のあるのを見ますのですが、選夫選妻のと、結婚の媒介が、斯のやうな手軽い手段で出来やうとは、夢にも信ずるとは出来無いのです、しかし、事はまた偶然の機會に由りて案外都合に運ぶやうなとは世間に間々あるとです、新聞紙上二三行の廣告の効能が現はれて、甘く出来た人もあるかは知れませぬけれど、此の如きは眞摯な手段だとは思はれませぬ、先づ稀有の例外と見做さねばなりません、常識のある者は、逆も纏まらぬ相談ではありませぬか。試みに、小間物屋に這入つて品物を買ひますに

も、彼れか此れかと打ち惑ふが人情の常ですもの見柄の好き相なものには丈夫で無い、頑固で爲に好き相なのは見つとも無いのが多い、これわと氣に入つたのになると價格が張ると云ふやうな鹽梅です、先づ自分の懐中と相談をせねばなりません、そして身分相應の物を買ふと云ふ流儀が、最も安全な方法であらうかと思ふので御座います。夫を選び、妻を選ぶの法も、亦矢張これと同じとではありませぬか、この「身分相應」といふとが、昔から云はれて居ることで、何等嶄新のを無きやうなれど、選夫選妻の要件は、只この相應と云ふが眼目であらうと思はれます、今の流行言葉で云へば「調和」です、貰う方と貰はれる方との調和を計るが肝腎なので御座います。選夫と云ひ選妻と云ふは、結婚前の尤も大切な準備なのです、善良の良人を迎へ又は善良の妻女を娶つて、幸福なる家庭を作らうと希望するのは、誰人とも同じとでありませぬ、選夫選妻の目的は、適當なる配偶者を選定して、之れと結婚し、平和幸福なる家庭、所謂スウキトホーム、ハッピー

ホームを造る爲めでありますが、その家庭の平和幸福は何に依りて得らるるか云ひますれば、只『身分相應』即ち『調和』によつて得らるゝのであります。

『帯には短かし褌にや長し』とは、選夫選妻の當時、常に人の口にする所でありまして、配偶者双方の調和し難いを云ふので、この調和と云ふのが、随分面倒なものなのです、それと云ふのが、人間には、皆然と云ふものがありまして、自分を公平に見るとは六ヶ敷いから、調和を得難いのであります。『破れ鍋にトチ蓋』と云ふのが、能く調和を云ひ現はしたもので、誠に面白い言葉ではありませんか、されば、夫を選ばず妻を選ぶに當つては、第一にこの双方の調和如何と云ふことに留意せねばなりません、さすれば後日の失敗を免れ、双方共に平和幸福なる家庭を作る基礎が出来やうと云ふものです、今これを條目的に述べて見ます。

第一、先方の氣質、自個の氣質との調和如何です、自個の捧ぐる愛情を、先方は之れを解して、

又之れに酬ゆるの同様の愛情を以て爲るや否やと云ふと、世俗に『犬猿蒂ならず』とか『水性」と火性』とか云ひまして、どこがどうと云ふのは無いけれど、只なんとなく気が合はぬとか、性が合はぬとか云ふやうなのが、幾程もあると、これが氣質の調和せぬからなのであります、甘いもの好きと辛いもの好きとは、調和せぬかと云ふに、さうでは無い、これは天性と云ふのでは無く習慣性であるから、境遇の變ると共に又變るをもあるけれども、性れ附きの氣質と云ふものは、なか／＼變り易いものでは無いのです、それゆゑ、同情に富める者と冷酷なる者とは一致が六ヶ敷い、謙葉的女子と殿様の男子とは結合が仕難い、茶屋町藝者屋で育つた娘では、先づ教育家宗教学の妻には不向きと云はねばなりません。容貌より氣質前』と云ふて、人によると、容貌よりも性質氣質に重きを置く程でありますから、氣質の調和を計るに、選夫選妻の一要件なのであります、水は相ひ交らず、氷炭は相ひ容れずですから、氣質の調和せぬ者は、先づ避けねばならぬをかと思

ふので御座います。

第二、先方の家庭と自個の家庭との調和如何です、何れの家庭に置きましても、皆それらの家庭法があり流儀がありまして、それが決して一様ではありませぬから、父兄長者の言語舉動に幼少の時から感化され、家法流儀が習ひ性となつて、各人が各個に一の習性あるとは争ふ可からざる事實です。それに又世間には能くあるとですが、金持ちと貧乏人との結婚杯は、屹度どちらかに不平が起り易くて、立派な調和は保てないものです。先方の家庭と自個の家庭との調和を穿鑿して後悔の無いやうにせねばなりません、幾何伶俐でも華族の姫様では、平民の家庭の良妻としては、チヨイト考へ物です、理想的結婚には、どうしても双方の家庭に餘り隔りの無い方が好いやうに思ふので御座います。

第三、双方の健康如何です、配偶者の選擇に於きまして最も大切なる條件は、其人が健康體であるか否かでありまして、たとひ他の條件は完全でありましても、其の身體が不健康であつたなら、逆

も平和幸福なる家庭を作るとは出来ないのであります、されば先方の血統を正し、自個一代のみならず、子孫永久の幸福を圖らうとするには、手数の煩はしいと杯を云ふ可きとは無からうかと思ひます、成る可く身分相應の努力にも堪へ、甲斐々々敷く家政を鹽梅してなほ餘裕ある程の妻を撰び、又世に出て事業職務を爲すにも、忽ちに閉口垂れるやうな夫を持つては、苦勞をせねばならぬから、仕合せな生活の基礎は、夫婦の達者なのが一番大事なとゆゑ、この個條を輕んずる譯には行きましますまい。

第四、容色の如何です、容色は健康と同様に大切なる條件であります、場合によりましては健康以上に大切なる者かも知れませぬ。健康は随分後天的作用で恢復變化せしむるものが出来無いでもありませぬけれど、先天的天賦の容色は、人工作用を以て美化し艶化せしむるものは出来無いのです。容色の美、風采の高さを見て、欽羨の情に堪へぬのは人間自然の至情であります、何人でも醜を嫌つて美を愛します、されば色を白くし、肌理を濃

にし艶を出すの藥劑は賣藥業者を忙殺せしめ、隆鼻器なる者が發明されまして三平二滿も天狗と化けられるやうな便利とはなり、新聞の廣告欄内一日として婦人化粧の藥品を見ざるを無しと云ふやうな勢ひですけれど、悲しいことには、天與の容色は藥劑器具では甘く誤魔化すとは出来無いので、天眞の麗、自然の美は、人工的に形作るには出来ませぬけれども、進化の原則は一日にして蚯蚓を大蛇に變へしむる者では無く、猫を虎に化せしむる者でもありませぬ、一時一刻の間、漸々の進化を成す者ですから、容色の美なる妻を娶らうとして人々均しく美人を娶らうとしてもそれは到底行はれるとではありませぬ、殊に自己の容色を顧みずして、只先方の容色のみの選り出しに苦心すると云ふは、餘んまり勝手の沙汰ではありませぬか、大抵似たり寄つたりの、ふさわしい程合ひを保つのが調和ではありませぬか、然るに世間大概の男子は自個の容顔と相談するを忘れて慮面も無く得手勝手なことを云ふて居りますのです、彼の『お前兵ト子、妾はお龜』と云ふが、語は凡

俗ですけれど、誠に調和の一致を云ひ現はした警句だと思ふので御座います。

第五、双方の社會的地位の調和如何です、世に『釣鐘と提灯』なる語があります、これは不調和不釣合ひを云ひ現はしたもので、自個は提灯のやうに軽く小さな身分であるに、先方は世に時めく地位の人の女であれば、亭主は妻女に頭が上からず、所謂『嗚大明神』『嗚關白』と云ふやうなことに成つて、亭主は嗚のお尻に敷れると云ふ不調和を來たすのです、『男尊女卑』と云ひ、『女尊男卑』と云ふが如き不調和不自然の結果は、主として双方の社會的地位の不平均、個人同士の人格資力等の權衡の調和せざるに座するとかと思はれますのです、夫れのみならず、双方の職業の種類に附きましては、一層の思考を要するのであります、職人の娘は直ちに美術家の妻たるには適しませぬ、田舎のお嬢さんは直ちに外交家の妻たるには適しませぬ、お茶屋の姐さんは宣教師の妻としては勿論不向きです、風儀が相ひ合はず、身柄が相ひ添はねば、配偶者双方の利益とは成らないのですから、

双方の社會的地位の調和を見計らはなければなりません。

第六、趣味と教育の如何です、現今社會一般の結婚談、選夫選妻の最大條件として、教育の有無多少を云々するは、一の流風と成つて居るかのやうに思はれます、或は宅の何子は某校の出身ですとか、何々さんは某校の出身で何が能くか出来になるとか云ふて、教育を以て筆筒長持同様一種の嫁入道具と心得て居る者が、滔々皆然りと云つて好いかも知れませぬ、女子教育の普及は双手を擧げて欣ぶ所ですけれど、學問知識の高下は結婚に對して左まで必要なる條件だとは思はれませぬ、學問知識の有るは誠に結構ですけれど、その學問知識を良人の前、他人様の前で、鼻に掛け得ぬ程度が宜しいかと思はれます、女子の方を多く云ふやうで濟みませぬが、社會の一員として、一家の主婦と成り子兒の親としては、高等女學校出身者なれば、目下我邦の社會に差支へはありますまいこれ位ひならば、別に自慢する程の學問があらうとも思ひませぬけれど、實際に不自由と云ふとも

ありますまい、けれどもそれも自個の身分地位と比較してのことで、或は高等小學校の卒業生でも十分な家庭もありませうから、一概には云ふとは出来ませぬが、要するに教育、智識は彼の氣質、健康、容色等の如く、天稟と成つて人為的作用を施し得ざるものとは違ひ、結婚後に於ても啓發感化の出来るものですから、選夫選妻の條件中で、一般人が思惟して居る程に重きを置く個條では無いのです、されど『趣味』なる者は教育及び感化に由りて容易に誘導し能ふものではありませぬ、趣味も亦多くは天性に伴ふたる者で、各人個々に相異なるは猶ほその面の同じからざるに似て居ります、ですから選夫選妻に臨みましても、教育よりは趣味の嗜好如何を質し、自個の趣味と一致する者を選ぶが双方の利益であるとは云ふまでも無いとです、自分は文學、美術、音樂杯高尚なる趣味を有せるに、先方の趣味野卑下劣にして共に語るに足らずと云ふやうでは、趣味の調和は求められませぬ、芝居を観るにも、花觀みに行くにも、同等若しくは稍近き趣味嗜好がありますれば、双方

の愉快は甚だ深いものがあらうかと思はれますのです。

要するに、選夫選妻説の主要の眼目は、天稟天與の美質を重き條件といたしまして、後天的に教育し感化し得らる可き者を輕き條件とするのが適當なる方法かと思ひます、我が邦の過去及び現在の如く、危険なる「富籤的結婚法」は、速に之れを廢止して、人間天與の和樂幸福を全ふし、義務責任を全ふしたいものだと思ふので御坐います

(KY生記)

▲電氣燈 は眼の爲めよろしき由此程露國の醫師の發見せしといふ眼は瞬きする度數多き程疲るゝ事多きものなりと、今全醫師の試験によるに眼の瞬きする度數は一分間毎に蠟燭の光にて六度と三分、瓦斯の光にて二度八分、太陽の光中にて二度と二分なるに、電氣燈の光中にて一度八分なりといふ
▲各國民の飲料 は其國々によりて異なるが、英國は茶を用ふる事多く北米合衆國にてはコーヒーを飲む事夥しく獨逸はビールを用ゆる事他に比類なく露國は酒精類を多く用ひ佛國にては葡萄酒を用ゆる事世界一なりといふ

贈送につきて

わけばの

自分の家から出た一尾の鯛が、七八軒の家を廻り廻はつて、又自分の家へ舞ひ戻つたといふ様な話は、よく聞くことであります、歳暮の贈品、暑中の見舞品には、今日でもこれが極めて普通在り勝ちのことで、従つて贈る方でも貰ふ方でもよく注意しなければなりません。

「誰さんのお家へは大分御無沙汰をして居るから、今日は暑中見舞を兼ねて、一度伺ひませう、然し、どうも手ぶらでも困るし、何か持つて行くものはないか知ら……」と困つて考へて居ると、丁度都合能く他所から、カステラの菓子折が到來した。これはよいものが來た包紙もこの儘間に合ふし、「といふので、中味は吟味しないで、其儘このカステラ折を持參するといふ具合の贈答が随分多いのですが、他の器物類、罐詰類の様なものならば宜しいとしても、魚類や菓子類のこの種の贈答は、時節柄餘程危険だといはねばなりません